



國労せんたいFAX版

号外

東日本大震災

ご子息を失った組合員から

仙台地本宮城県支部 東北工事事務所分会

No. 866 「ろばた」 より 2011.4.2

12日14時30分頃、突然仙台では通じるはずのない自分の携帯に、息子の嫁「淳子」から電話が入った。「毒也くんが死んだ」
「なに・・・」と言つた
きり声が出なかつた。
「すぐ帰るから待つて
いろ」というのがやつと
だつた。車を借りて乗り
ついで、仙台から家に戻つ
たのが19時30分、地域の人たちが集まつて、発電機を回して灯りをともし
ていてくれていた。
息子が家に帰つてきたのは翌13日の15時過ぎだつた。受け入れ難い現実を目の当たりにして途方に
くれてしまつた。

息子の地震当日の経過は、朝出勤、14時46分地震発生、14時49分大津波警報発令、14時56分救急出動命令、14時58分救急車出発、15時03分救急現場到着(徒歩1分で海辺)、15時17分救急車現場出発、15時26分、遺体発見現場の時計が止まつていた時刻、となつていい。
納得できないのは、大津波警報が出た後になぜ海辺に向かつて出動命令を出したのかである。

夜遅く宮古市長と消防士長が土下座して謝りに来た。ある人は「人命救助に最後まで尽くした、名譽ある死だ」、「今度の津波は想定外だ」と言う。しかし、残された家族にとって、誰が謝ろうが、想定外だろうがそんなこと関係ない。ただ、息子が帰ってきてほしいと願うだけ。

市長と消防士長に向かって「息子は特攻隊でない」と怒鳴ってしまった。

電気がない、電話通じない、灯油・ガソリン等の燃料がない。そんな中で葬儀の準備は進められた。家に祭壇を設置したが、飾る花が手に入らない。娘たちとテエッシュペーパーを折つてそれに色をつけし飾りつけた。寂しくないようとに棺の中には思い出の写真や折鶴などをいっぱい並べた。葬儀屋の手が回らず祭壇の写真もパソコンで引き伸ばし、間に合わせのものでやらざるを得なかつた。香典返しや忌明けも準備できず、まさに手作りの葬儀となつた。

場代表で消防士長に参列していただいたが、弔辞の一言もなかつた。家族としては、息子に對し「ご苦労様」と慰効の言葉が欲しかつた。葬儀が終わつて2日後、高校の同級生という赤旗の新聞記者が尋ねてきた。救急車が横たわつてゐる場所の状況を教えてくれた。次の日、現地に行つてみた。そこには、見るも無残な光景が繰り広げられてゐた。町の中心地に大きな船が横たわり、山田線の鉄橋は落ちて河原に散乱、瓦礫の山からは異臭が漂つていた。現地で会つた人達からいろんな話を聞くことができた。その一人は、「みんな避難して高台から救急車を見ていた。車を止めて、必死に患者を救い出そうとしていたようだ。早く逃げればと思つていたところに津波が押し寄せた」こんな話を聞かされ、「俺も、何かをしなければ」と思い、娘婿とむしろで横断幕を作つて国道脇に掲げた。

坂本さん達が作成した横断幕。もう一つある



坂本さん達が作成した横断幕。もう一つある

團結 抵抗 統一